

別紙 名誉毀損部分一覧表

日付	掲載誌	記述	番号
2014年4月17日	週刊 (b) 2014年4月17日号 掲載の論文を転載	意図的な虚偽報道	①
		氏は韓国の女子挺身隊と慰安婦を結びつけ、日本が強制連行したとの内容で報じたが、挺身隊は勤労奉仕の若い女性たちのことで慰安婦とは無関係だ。原告氏は韓国語を操り、妻が韓国人だ。その母親は、慰安婦問題で日本政府を相手どって訴訟を起こした『 』の幹部である。原告氏の『誤報』は単なる誤報ではなく、意図的な虚偽報道と言われても仕方がないだろう。	②
2014年10月16日 及び 2014年10月23日	週刊 (b) 2014年10月23日号 掲載の論文を転載	原告氏は b 「大の人格教育にどのように貢献すると考えるか」と。23年前、女子挺身隊と慰安婦を結びつける虚偽の記事を書いた原告氏は、10月14日の今日まで、自身の捏造記事について説明したという話は聞こえてこない。	③
		23年間、捏造報道の訂正も説明もせず類被りを続ける元記者を教壇に立たせ学生に教えさせることが、一体、大学教育のあるべき姿なのか。	④
		しかし、原告氏の捏造報道と学問の自由、表現の自由は異質の問題である。	⑤
		この女性、。氏は女子挺身隊の一員ではなく、貧しさゆえに親に売られた気の毒な女性である。にも拘らず、原告氏は。氏が女子挺身隊として連行された女性たちの中の生き残りの一人だと書いた。一人の女性の人生話として書いたこの記事は、挺身隊と慰安婦は同じだったか否かという一般論次元の問題ではなく、明確な捏造記事である。	⑥
2014年9月13日	週刊 (c) 2014年9月13日号 掲載の論文を転載	若い少女たちが強制連行されたという報告の基となったのが「 」の原告記者(すでに退社)の捏造記事である。原告氏は慰安婦とは無関係の女子挺身隊という勤労奉仕の少女たちと慰安婦を結び付けて報じた人物だ。	⑦
2014年10月18日	週刊 (c) 2014年10月18日号 掲載の論文を転載	ならば捏造かと考えるのは当然である。原告氏が捏造ではないと言うのなら、証拠となるテープを出せばよい。そうでもない限り、捏造だと言われても仕方がない。	⑧
2014年10月25日	週刊 (c) 2014年10月25日号 掲載の論文を転載	慰安婦と女子挺身隊を一体のものとして捏造記事を物した原告) a   新聞元記者	⑨

謝罪記事目録

- 1 弊社は、雑誌 (a) 2014年4月号において原告氏が、1991年に所謂従軍慰安婦について書いた記事が「捏造」であると記載致しましたが、全くの誤りでしたので、記事を取り消した上で、原告氏に深くお詫び申し上げます。
- 2 弊社は、週刊 (b) 2014年4月17日号及び同年10月23日号の「日本ルネサンス」において原告氏が、1991年に所謂従軍慰安婦について書いた記事が「捏造」や「意図的な虚偽報道」であると記載致しましたが、全くの誤りでしたので、記事を取り消した上で、原告氏に深くお詫び申し上げます。
- 3 弊社は、週刊 (c) 2014年9月13日号、 (c) 同年10月18日号、 (c) 同年10月25日号の「新世紀の風をおこす オピニオン縦横無尽」において、原告氏が、1991年に所謂従軍慰安婦について書いた記事が「捏造」であると記載致しましたが、全くの誤りでしたので、記事を取り消した上で、原告氏に深くお詫び申し上げます。
- 4 私は、2014年9月13日、同年10月16日、同月18日、同月23日、同月25日付コラムにおいて、原告氏が、1991年に所謂従軍慰安婦について書いた記事が「捏造」「意図的な虚偽報道」であると記載致しましたが、全くの誤りでしたので、記事を取り消した上で、原告氏に深くお詫び申し上げます。

掲載要領目録

- 1 掲載媒体 雑誌 (a)  
掲載場所 目次の次の頁  
大きさ 210mm×145mm  
色 白地 文字は黒色  
フォント 12ポイント
  
- 2 掲載媒体 週刊 (b)  
掲載場所 目次の次の頁  
大きさ 220mm×150mm  
色 白地 文字は黒色  
フォント 12ポイント
  
- 3 掲載媒体 週刊 (c)  
掲載場所 目次の次の頁  
大きさ 250mm×184mm  
色 白地 文字は黒色  
フォント 12ポイント
  
- 4 掲載媒体 乙1 オフィシャルサイト  
掲載場所 乙1 オフィシャルサイトのホーム画面

に、「原告氏に対する謝罪記事」との一文(フォントサイズは10ポイント以上とする)を掲載し、同文に謝罪記事が掲載されているウェブページを参照

するハイパーリンクを設定する。

色 文字は黒色  
フォント 9ポイント以上  
掲載期間 1ヶ月間

## 記事A

思い出すと今も涙

元朝鮮人従軍慰安婦 戦後半世紀 重い口開く

日中戦争や第二次大戦の際、「女子挺身隊」の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた「朝鮮人従軍慰安婦」のうち、一人がソウル市内に生存していることがわかり、「*j*」( *i* ・共同代表、十六団体約三十万人) が聞き取り作業を始めた。*j* は十日、女性の話を録音したテープを *a* 新聞記者に公開した。テープの中で女性は「思い出すと今でも身の毛がよだつ」と語っている。体験をひた隠しにしてきた彼女らの重い口が、戦後半世紀近くたって、やっと開き始めた。

#### 韓国の団体聞き取り

*i* 代表らによると、この女性は六十八歳で、ソウル市内に一人で住んでいる。女性の話によると、中国東北部で生まれ、十七歳の時、だまされて慰安婦にされた。二、三百人の部隊がいる中国南部の慰安所に連れて行かれた。慰安所は民家を使っていた。五人の朝鮮人女性がおり、一人に一室が与えられた。女性は「*y*」(仮名) と日本名を付けられた。一番年上の女性が日本語を話し、将校の相手をしていた。残りの四人が一般の兵士二、三百人を受け持ち、毎日三、四人の相手をさせられたという。「監禁されて、逃げ出したいという思いしかなかった。相手が来ないように思いつづけた」という。また週に一回は軍医の検診があった。数ヶ月働かされたが、逃げることができ、戦後になってソウルへ戻った。結婚したが夫や子供も亡くなり、現在は生活保護を受けながら、暮らしている。

女性は、「何とか忘れて過ごしたいが忘れられない。あのときのことを考えると腹が立って涙が止まらない」と訴えている。朝鮮人慰安婦は5万人とも8万人とも言われているが、実態は明らかでない。*i* 代表らは「この体験は彼女だけのものではなく、あの時代の韓国女性たちの痛みなのです」と話す。九月からは事務所



記事B

帰らぬ青春 恨の半生

韓国の「 f 」の元朝鮮人従軍慰安婦、元軍人・軍属やその遺族三十五人が今月六日、日本政府を相手に、戦後補償を求める裁判を東京地裁に起こした。慰安婦だった原告は三人。うち二人は匿名だが、 e

)さん(六七) =ソウル在住=だけは実名を出し、来日した。元慰安婦が裁判を起こしたのは初めてのことだ。裁判の準備のため、弁護団と「

①」 は4度にわたり韓国を訪問した。弁護士らの元慰安婦からの聞き取り調査に同行し、 eさんから詳しい話を聞いた。恨(ハン)の半生を語るその証言テープを再現する。

17歳の春

「私は満州(現中国東北部)の吉林省の田舎で生まれました。父が、独立軍の仕事を手伝う民間人だったので満州にいたのです。私が生後百日位の時、父が死に、その後、母と私は平壤へ行きました。貧しくて学校は、普通学校(小学校)四年で、やめました。その後は子守をしたりして暮らしていました」

『「そこへ行けば金もうけができる」。こんな話を、地区の仕事をしている人に言われました。仕事の中身はいいませんでした。近くの友人と二人、誘いに乗りました。十七歳(数え)の春(一九三九年)でした」

「平壤駅から軍人たちと一緒に列車に乗せられ、三日間。北京を経て、小さな集落に連れて行かれました。怖かったけれど、我慢しました。真っ暗い夜でした。私と、友人は将校のような人に、中国人が使っていた空き家の暗い部屋に閉じ込められたのです。鍵をかけられてしまいました。しまったと思いました」

「翌朝、馬の声に気づきました。隣には三人の朝鮮人の女性がいました。その人たちから『おまえたちは、本当にばかなことをした。こんなところに来て』と

言われました。逃げなければならないと思ったのですが、周りは軍人でいっぱいでした。友人と別にされ、将校に『言う通りにしろ』と言われました」

「将校は私を暗い部屋に連れて行って、『服を脱げ』と言いました。恐ろしくて、従うしかありませんでした。そのときのことはしゃべることさえ出来ません。夜明け前、目が覚めると将校が横で寝ていました。殺したかった。でも、出来ませんでした。私が連れて行かれた所は、『北支（中国北部）カッカ県 D 』というところだということが後で分かりました」

### 赤堀の家

「この慰安所は赤い堀の家でした。近くには民間人はいません。軍と私たちだけでした。五人の女性がおりました。二十二歳で最年長の z は将校だけを相手にしていました。①、②、それに友人の r 。私は ③ と呼ばれていました。近くの部隊は三百人くらいでした。その部隊について、移動するのです」

「軍人たちは、サックをもってきました。朝八時を過ぎたら、やって来て、夜は将校が泊まることもありました。休む暇はありません。長い人でも三十分以内でした。でないと外から声がするのです。多いときは二十人以上相手することもありました。しかし、戦闘の時は、静かでした。『ダ、ダ、ダ』という銃撃の音が聞こえるときもありました。お金などはもらったこともありません」

「食べ物は軍人たちがもって来ました。米やミソ、おかずなど。台所があり、自分たちで作って食べました」

「 D には一カ月半いて、また別のところに移動しましたが、名前は覚えていません。そうこうするうちに、肺病になりました」

「ずっと逃げたいと思っていました。そんなある夜、私の部屋に、男の人が忍びこんできました。びっくりしましたが、その人は『私も朝鮮人で寝るところがなくて来た』と言いました。両替商をしているという、その人に助けてくれるよ



うに頼み、一緒に逃げました。他の人まで連れて行くような余裕はありませんでした。その年の秋のことでした」

### 解放の後

「南京、蘇州などを経て、上海へ行き、その人と夫婦になりました。質屋をやり、娘と息子が生まれました。一九四六年の夏に、船で仁川へ戻り、ソウルの難民収容所に入りました。そこで娘が死にました。そのあと、ソウルで部屋を借り、私はノリ売りの商売を始め、夫は掃除夫になりました」

「夫は酒を飲むと、『お前が慰安所にいたのを助けてやったではないか』と言って、私を苦しめました。その夫も、朝鮮戦争の動乱の中で死に、息子を育てながら行商しながら生活していました。しかし、その息子も小学校四年の時に水死しました」

「生きていこうという気持ちもなくなりました。死ぬことしか考えませんでした。全羅道、慶尚道、済州道など全国を転々としました。酒やたばこをやり、人生を放棄したような生活を続けていました。10年ぐらい前に、これじゃだめだと思い始めました。ソウルに来ました。家政婦をやったお金で、小さな部屋を借りています。私の不幸は慰安所に足を踏み入れてから、始まったのです。この恨みをどこにぶつけようか。だれにも言えず苦しんでいました。今は月に米10キロと3万ウォン（約5200円）の生活保護を貰っています」

### 募る怒り

「いくらお金をもらっても、捨てられてしまったこのからだ、取り返しがつきません。日本政府は歴史的な事実を認めて、謝罪すべきです。若い人がこの問題をわかるようにして欲しい。たくさんの犠牲者がでています、碑を建ててもらいたい。二度とこんなことは繰り返して欲しくない」

「日本政府がウソを言うのがゆるせない。生き証人がここで証言しているじゃ

ないですか」

これまで韓国に戻った元慰安婦たちは、沈黙を続けてきた。ところが、昨年6月、日本政府は強制連行に関する国会で「従軍慰安婦は民間業者が連れ歩いた」など軍や政府の関与を否定する答弁をし、その後も「資料がない」などとくり返してきた。こうしたニュースを聞いた e 氏は、「自分が生き証人だ」と今年夏に、はじめて名乗り出た。原告3人の外にも最近、体験を公表する女性が出て来た。

一方、

④

も慰安婦に関する情報を集めるなど調査を続けている。